

『アール・ブリュット』作品の鑑賞行為』に関する考察

—「武蔵野アール・ブリュット 2017」来場者アンケートの分析と考察—

A study of appreciation behavior for “Art Brut” Analysis and consideration from the appreciator’s answer about “MUSASHINO ART BRUT 2017”

井ノ口 和子
Kazuko INOBUCHI

概要

アール・ブリュット (art brut) はフランス語で「生(き)の芸術」を意味する言葉であり、現在では「美術教育を受けていない人の美術」, 「障害者の美術」と理解されている。本研究は「武蔵野アール・ブリュット 2017」における鑑賞者アンケートの回答と記述を分析・考察し、鑑賞者がアール・ブリュット作品から何を感じとるのかを明らかにすることを目的とする。その結果、鑑賞者は「自分の価値観の広がり」や「アートを身近に感じることができた」という印象をもつことがわかった。アール・ブリュット作品を鑑賞することは、従来の美術の枠組みに縛られず、自分なりの新しい価値を創造する可能性をもつものである。

キーワード：アール・ブリュット, 鑑賞, 行動, アンケート

Abstract

“Art Brut” mean the artistry of “draft beer (putting)” by French. Recently That’s understood as “Artworks of the person who is not educated about fine arts” and “the person with disabilities's arts”. This study had aimed to make clear that “What does we get from the Art Brut works”, through from the analyses and consideration of questionnaire description “MUSASHINO ART BRUT 2017” As a result, the appreciators have an impression that “The spread of the sense of values” and “Feeling familiar to the art.” This result suggested the possibility that the personal new value is created without structures of conventional fine arts.

Keywords: Art Brut, appreciation, behavior, questionnaire

1. 問題の所在

アール・ブリュット (art brut) という言葉は、フランス語で「生(き)」の芸術」を意味するものである。英語ではアウトサイダー・アート (outsider art) と呼ばれるが、アウトサイダーという言葉から「阻害された」, 「部外者」と否定的、差別的な意味合いを連想させるとして、現在では一般的にアール・ブリュットという言葉が広く使われ、「美術の専門的な教育を受けていない人たちが制作した美術作品」と理解されている。

1.1 研究の背景

東京都武蔵野市において、2017年7月に「武蔵野アール・ブリュット 2017」が開催された。「武蔵野アール・ブリュット 2017」は武蔵野市、武蔵野文化事業団、武蔵野アール・ブリュット実行委員会が主催し、市民

協働によって作り上げられた展覧会である。武蔵野市健康福祉部障害者福祉課に事務局を置き、市内で障害者アートなどの表現活動に関わっている人を中心に実行委員会が組織された。

筆者は美術教育を研究分野とし、特に鑑賞教育の重要性に着目して研究を進めている。これまで図画工作科の学習題材として、子どもたちと美術館での鑑賞活動を実践してきた。また、数多くのアール・ブリュットの展覧会やシンポジウムに足を運び、美術教育を考える立場からアール・ブリュットに関心を寄せてきた。学校現場での実践として、1999年には、京都の知的障害者施設の作品による巡回企画展を品川区立小学校4校を会場とし開催した¹。これらの経緯から「武蔵野アール・ブリュット」実行委員会に関わることとなった。

今、アール・ブリュットが人々をこれほどまでに惹きつけるのは何故なのか。鑑賞者はアール・ブリュット作品に何を見るのか、何を感じるのかを考察することで、この問いに迫ることができるのではないだろうか。

1.2 研究の目的と方法

本研究の目的は、鑑賞者はアール・ブリュット作品に何を見るのか、何を感じるのかを分析・考察することである。具体的には、第一に、アール・ブリュットに関する先行研究・参考文献として服部正 (2003)、保坂健二郎 (2013)、ミシェル・テヴォー (訳:杉村昌昭, 2017)、新井薫 (2017) などの論考を援用し、アール・ブリュットについての歴史や概念を整理する。第二に、筆者が実行委員として関わった「武蔵野アール・ブリュット 2017」の鑑賞者アンケートへの回答と記述を分析、考察する。

2. アール・ブリュットとは

「アール・ブリュット」と似たような概念を示す言葉として、「アウトサイダー・アート (outsider art)」、「孤立した芸術 (isolated art)」、「生の芸術 (raw creation)」などがあげられる。国内では、2000年ぐらいまでは「アウトサイダー・アート」が多く使われていたが、最近は「アール・ブリュット」が多く使われている。国内特有の言葉として、「エイブル・アート (able art)」という言葉が1990年代後半から2000年代まで使われていた。本章では、アール・ブリュットの内容と歴史について整理する。

2.1 アール・ブリュットが生まれるまで (20世紀前半までの前衛芸術)

アール・ブリュット作品は、20世紀以前にはほとんど見当たらない。その理由は、西欧社会が制度化された規範から逸脱したものに向けて長い間関心を寄せてこなかったためである。アール・ブリュットという概念が生まれたのは20世紀前半になってからのことである。

アール・ブリュットという概念が生まれる萌芽として、西欧における19世紀から20世紀にかけての前衛芸術家たちが古典的な規範システムからの脱却を試みていたことが指摘されている (服部, 2003)。彼らが既存の価値観から脱却しようとして目を向けたのは、それまでの美の規範や社会の評価から距離を置くものであり、例をあげれば、「プリミティヴ」、「子どもの表現」、「狂気 (精神病者の芸術)」であった。

西欧の近代文明やその合理主義に反発し、子どもや精神障害者による美術の価値を積極的に評価し、社会に訴えてきたドイツ表現主義の画家としてパウル・クレー (Paul Klee 1879-1940)、ワシリー・カンディンスキー (Wassily Kandinsky 1866-1944) などがあげられる。また、パリではパブロ・ピカソ (Pablo Picasso 1881-1973) やジョルジュ・ブラック (Georges Braque 1882-1963) がアフリカやオセアニアの彫刻から大きな影響を受け、「キュビズム」を生み出している。

一方、「精神病理」と造形表現に関しては、精神科医が精神病理患者によって制作された作品に着目した。スイスの精神科医ヴァルター・モルゲンターラー (Walter Morgenthaler 1882-1965) がヴァルダウ精神病院にてアドルフ・ヴェルフリ (Adolf Wölfli 1864-1930) の制作活動に注目し、著作を発表している (ミシェル・テヴォー, 訳 / 杉村昌昭, 2017)。

2.2 アール・ブリュット (art brut), アウトサイダー・アート (outsider art)

「アール・ブリュット」の概念を構築し、アール・ブリュットとされる作品の大半を発見したのは、ジャン・デュビュッフェ (Jean Dubuffet 1901-1985) である。ミシェル・テヴォーは、アール・ブリュットについて、ジャン・デュビュッフェが『文化的芸術よりもアール・ブリュットを』(Jean Dubuffet, 1967) と題されたテキストの中で、以下のように述べていると著している (訳/杉村, 2017)。

われわれの言うアール・ブリュットとは次のようなものである。すなわち、それは芸術的文化的の影響を免れた人々によってつくられた作品であり、そこでは、知的な人々のなかで起きることとは反対に、模倣はほとんどと言っていいほどなく、作品の作り手がすべてを (主題, 材料の選択, 作品化の手段, リズム, 表現法, 等々) 伝統的芸術のありきたりの型からではなく、自分自身のなかの奥深い場所から引き出す。われわれはそこで、まったく純粋で生のままの芸術的遂行が行われ、作り手自身の固有の衝動を唯一の起点として芸術がその全局面において再発明される現場に立ち会うのである。したがってそれはひとえに発明という機能だけが姿を表す芸術であり、文化的芸術のなかに絶えず姿を見せる無節操な猿真似とはおよそ異なったものなのである。

ミシェル・テヴォー、服部の先行研究を基にデュビュッフェがアール・ブリュットという概念を提唱した経緯を以下に、まとめる。

デュビュッフェは、1945年にスイスに出向き、精神医学者から患者の作品を譲り受けたことを機に作品の収集を開始した。それまで、「精神病患者の芸術」、「精神分裂病の芸術」などと呼ばれることが多かった作品を医学の分野から切り離したいと考え、「アール・ブリュット」という造語を用いた。デュビュッフェは、「胃弱の人や膝の病気の人の芸術がないように狂人の芸術などない」と病気の有無に関わらず全ての芸術家の創造のメカニズムは同じであると主張している。1947年には、パリに「アール・ブリュット館」を作成し、アール・ブリュット協会を設立した。1949年には、大規模なアール・ブリュット展を開催している。1976年には、スイスのローザンヌ市に「アール・ブリュット・コレクション」を開館させた。この施設は、現在でもアール・ブリュット作品の収集や研究が続けられ、アール・ブリュットの重要な拠点となっている。

アール・ブリュットとはほぼ同意義として使用される言葉として「アウトサイダー・アート」がある。この言葉は、1972年に美術評論家であるロジャー・カーディナル (Roger Cardinal 1940-) による造語であり、「正規の美術教育を受けていないアーティストが生み出す作品である」とされている。

「アウトサイダー・アート」という言葉が広く理解されるようになった契機として、「パラレル・ヴィジョン - 20世紀美術とアウトサイダー・アート」展が挙げられる。この展覧会は、1992年から93年にロサンゼルス、マドリード、バーゼルを巡回した後、1993年9月から12月にかけて東京の世田谷美術館でも開催され、大きな影響を及ぼした。

2.3 戦後日本のアール・ブリュット

戦後の日本では、アーティストが福祉の現場と直接的に関わりながら作品のプロモーションにかかわる動きが生まれてくる。京都のみずのき寮 (現、みずのき) における日本画家の西垣籌一 (1912-2000)、滋賀県信楽青年寮における絵本作家の田島征三 (1940~)、千葉盲学校における立体造形作家である西村陽平 (1947~) などがあげられる。中でも、もっとも歴史が長く重要な事例の一つとして、西垣が関与した福祉施設みずのき寮に着目する。西垣は1964年から彼が没する2000年まで絵画教室で絵の指導を行っていた。この施設から生まれた作品32点が、日本では初めて「アール・ブリュット」と呼ばれる作品となり、ローザンヌのアール・ブリュット美術館に収蔵された。しかし、服部は「みずのき寮で西垣が行ったのは、『プロの絵描き養成を目的として』行われてきたと彼自身が述べている」と指摘している。アール・ブリュットが美術教育を受けない人々による表現であるのなら、みずのきから生まれた作品をアール・ブリュットと呼ぶには矛盾

が生じる。服部は、「正統的な美術教育という反アウトサイダー・アートのものが、知的な障害をもつ人たちと出会い、そこにアウトサイダー・アートの作品が生まれたという事実、みずのき絵画教室の面白さがある」と述べている。西垣没後に絵画教室は幕を閉じたが、現在もアトリエとしての活動を続けている。2012年には日本財団の支援により作品や活動のデジタル・アーカイブ化が進められ、みずのき美術館が開館した。みずのき寮の作品がアール・ブリュットなのかという矛盾は、アール・ブリュットと教育の問題を示すものであり、日本での特徴的な方向性と言えよう。

アール・ブリュットと教育との問題に加え、日本におけるアール・ブリュットの活動としてエイブル・アート (able art) があげられる。エイブル・アートの活動は、1994年に「エイブル・アート・ジャパン」が設立され、「エイブル・アート・ムーブメント (可能性の芸術運動)」を提唱し、障害者を取り巻く社会環境の改革を目指してきた。1990年代には広く障害者美術を指す言葉として広まったが、現在では作品を生み出す作者や、作者を取り巻く社会環境に目を向ける社会運動としてアール・ブリュットとは一線を画している。ここで問題となるのは、アール・ブリュットと「教育」、そして「福祉」である。「美術」・「教育」・「福祉」からの文脈から語られていることが日本におけるアール・ブリュットの文脈を複雑なものにしている。

戦後日本におけるアート・ブリュットの美術展としては、「パラレル・ヴィジョンー 20世紀美術とアウトサイダー・アート」展 (世田谷美術, 1993年9月から12月) が巡回開催され、障害者の美術への大きな関心を集めた。その後の「アール・ブリュット・ジャポネ」展 (埼玉県立近代美術館, 新潟市美術館, 福岡市美術館, 2011年) の開催、さらに日本各地に開館したアール・ブリュット作品を展示する美術館やギャラリーなど、日本におけるアール・ブリュットへの関心が高まっていることがわかる。中でも、滋賀県近江八幡市のボーダレス・アートミュージアム MO-MA は滋賀県社会福祉事業団が運営する美術館であり、活動の中心を障害者の表現活動に置いている。このように、福祉施設, NPO, 行政を巻き込んだ大きな流れが生み出されようとしている。

さらに、2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催に関連したムーブメントが日本各地で起きている。パラリンピックは障害者スポーツ競技大会であるが、スポーツだけではなく音楽、演劇、美術など文化面での支援が行政や市民活動として展開されている。2012年には東京都に「アーツカウンシル東京」が設立され、幅広い芸術活動への支援事業を展開している。アール・ブリュットが社会により広がることになるのか、あるいは一過性の流行として関心が低くなるのか、アール・ブリュットの様々な展開がその真価を問われることになる。

3. 「武蔵野アール・ブリュット 2017」

武蔵野市は、これまで市民参画の計画づくりやコミュニティーセンターなど市民参加で様々な事業をつくりあげてきた歴史がある。また、市内には多様な形でアートに取り組み、発表している団体や集まりが多数存在する。2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催に向け、「武蔵野市に関わる人たち」でつくり上げる企画を実現させたいという前市長の強い願いにより「武蔵野アール・ブリュット」展の開催が決定した。

作品募集要項(「武蔵野アール・ブリュット 2017」実行委員会, 2017)には、「アール・ブリュットとは『生(き)の芸術』と表され、既成の表現法にとらわれずに独自の手法と発想で制作された美術作品のことです」と定義され、本展で募集する作品については「障害のあるなしに関わらず、表現したい気持ちを自由に発揮したワクワクする作品」としている。

本展の概要は以下の通りである。

開催趣旨

1. 2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会の機会を生かし、アール・ブリュットに取り組む人たちが「広く作品を発信する」機会をつくとともに、作品制作のモチベーションとなるようなアート展を目指します。
2. 様々な形で活動する団体が、協働してアール・ブリュット展を創りあげることで、「アートを通じた協働」が継続していく取り組みとします。
3. 制作者のバックグラウンド等についても伝えるアール・ブリュットの特徴を生かし、アール・ブリュットというアートを市民に知ってもらうと同時に、「アートを通して障害のある方などへの理解を深め、多様性を大切にする地域づくり」を進めます。

- ①開催期間：2017年7月7日（金）から7月10日（月）まで
- ②開催場所：吉祥寺美術館、ギャラリー永谷1・2、アートギャラリー絵の具箱
- ③主催：武蔵野アール・ブリュット実行委員会、武蔵野市、武蔵野文化事業団
- ④応募資格：武蔵野市に何らかの繋がりがある方、作者本人または親権者（未成年）、保護者、後見人もしくは作者から作品の使用権を移譲された法人
- ⑤審査委員：坂口寛敏氏（東京藝術大学名誉教授、公益財団法人武蔵野文化事業団理事）、西村陽平氏（日本女子大学名誉教授、造形作家）、丸亀敏邦氏（武蔵野美術学園長、俳人・墨彩画家・ハンコ作家）
- ⑥コーディネーター：三友周太氏（美術家、薬剤師）
- ⑦招待作家：萩野トヨ氏（1938年武蔵野市生まれ、滋賀県の知的障害者施設もみじ・あざみで暮らす。）
- ⑧関連企画
 - ・審査委員によるパネルディスカッション（ファシリテーター：三友周太氏）
 - ・上映会：記録映画「アール・ブリュットが生まれるところ」（監督：代島治彦氏）
 - ・アフタートーク：代島治彦氏×荒井良二氏（絵本作家）
 - ・ワークショップ：三友周太氏による「HIMONINGEN（ヒモンゲン）」みんなのアート

応募作品総数 198 点の中から、審査委員 3 名による一次（写真）審査を行い（2017 年 3 月）、120 点の一次審査通過作品が選出された。5 月には作品現物による二次審査を実施し、受賞作品及び市長賞・審査委員賞が決定された。二次審査を通過した受賞作品が吉祥寺美術館へ、それ以外の一次審査通過作品が三ヶ所の会場に展示された（吉祥寺美術館：66 点、ギャラリー永谷 1・2：38 点、ギャラリー絵の具箱：16 点、（写真 1～3））。

4 日間の開催期間中の「武蔵野アール・ブリュット 2017」への来場者は 4 会場を合わせて延べ人数 2,856 名（表 1）であった。



写真 1 会場設営

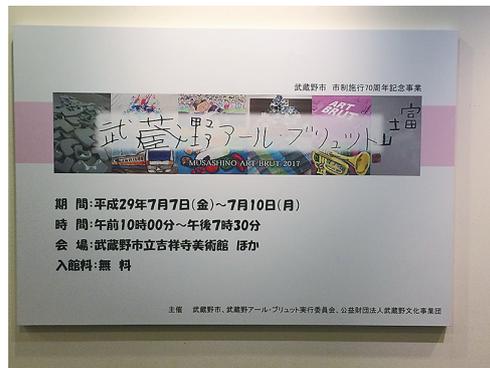


写真 2 会場正面表示



写真 3 会場の様子

表1 武蔵野アール・ブリュット 2017 来場者数

日付・会場	吉祥寺美術館	ギャラリー永谷 1・2	アートギャラリー 絵の具箱	計
7月7日(金)	293	102	106	501
7月8日(金)	544	202	151	897
7月9日(金)	500	161	146	807
7月10日(金)	306	160	185	651
	1643	625	588	2856

4カ所の会場において実行委員会が作成したアンケート用紙²を配布した。アンケートでの質問項目は以下の通りである。

- ①「武蔵野アール・ブリュット 2017」の開催を何でお知りになりましたか（複数回答可）
- ②「武蔵野アール・ブリュット 2017」にご来場いただいたきっかけは何ですか
- ③「武蔵野アール・ブリュット 2017」はいかがでしたか
- ④また鑑賞してみたいですか
- ⑤武蔵野アール・ブリュット実行委員会やボランティアとして携わりたいと思いますか
- ⑥本展示で印象に残った作品がありましたら3点まであげてください

3.1 来場者の回答結果と分析

回収は464名であり、回収率は16.2%である（来場者は延べ人数であるため、正確な回収率は不明。項目によって回答、無回答があるため、項目によって合計数は一定ではない）。

アンケート回答者の詳細は以下の通りである（表2.1～2.4）。

表2.1 回答者住所

	回答数	構成比
武蔵野市内	162	39.4%
東京23区内	87	21.2%
東京市町村部	129	31.4%
東京都外	33	8.0%
合計	411	100.0%

表2.3 回答者年齢

	回答数	構成比
20歳未満	20	4.8%
20代	50	12.1%
30代	58	14.0%
40代	90	21.8%
50代	87	21.1%
60代	68	16.5%
70代	35	8.5%
80歳以上	5	1.2%
合計	413	100.0%

表2.2 誰と来場したか

	回答数	構成比
ひとりで	205	49.4%
家族と	123	29.6%
友人と	57	13.7%
学校・施設等の団体で	22	5.3%
その他	8	1.9%
合計	415	100.0%

回答者の住所は、武蔵野市が39.4%と最も多くなっているが、東京市町村部、23区内からの来場もそれぞれ31.4%、21.2%であり、東京都全域から来場している（表2.1）。また、「家族と」訪れているのが29.6%となっているのは、出品している作家の家族が訪れていると推察される。また、49.4%と半数近くが「ひとりで」訪れていることは着目すべきところである（表2.2）。来場者の年齢層は40代から50代・60代が多く（表2.3）、このことは「家族と」来場した割合が多かったことと関連し、障害をもつ子どもの親世代が多く来場していると推察される。

3.1.1 「武蔵野アール・ブリュット2017」の開催を何でお知りになりましたか（複数回答可）

開催を知ったきっかけについては、最も高いポイントは「家族、知人から」であり32.2%、次いで武蔵野市報（20.8%）、ポスター・チラシ（18.4%）となっている（表3.1）。武蔵野市での初めての開催であること、実行委員会メンバーのほとんどが武蔵野市において障害者のアート活動を支援する団体・組織に関与していることなどから、実行委員を通じて広報活動が行われたことに因るものと考えられる。したがって、本展の開催は「福祉」のネットワークを通して広まったと考えられる。

一方で、「偶然通りがかりに」と回答した人が7.5%ということに着目したい。「ポスター、チラシ」（18.4%）という回答と併せて考察すると、展示内容に興味をもったことから来場した人が少なくない。本展が開催された吉祥寺は多くの人々で賑わう街である。メイン会場である吉祥寺美術館、他ギャラリー3箇所も吉祥寺駅から5分以内に位置しているというアクセスの良さも本展に来場したきっかけとなっている。

表3.1 開催を知ったきっかけ

	回答数	構成比
ポスター、チラシ	103	18.4%
武蔵野市報	116	20.8%
新聞、雑誌	8	1.4%
アール・ブリュットホームページ	37	6.6%
テレビ、ラジオ	4	0.7%
家族、知人から	180	32.2%
偶然通りがかりに	42	7.5%
その他	69	12.3%
合計	559	100.0%

表3.2 来場のきっかけ

	回答数	構成比
見たい展示があった	77	15.4%
関係者がいた	168	33.5%
内容に興味があった	225	44.9%
その他	31	6.2%
合計	501	100.0%

表3.3 満足度

	回答数	構成比
とても満足	188	45.7%
満足	194	47.2%
普通	27	6.6%
不満	2	0.5%
とても不満	0	0.0%
合計	411	100.0%

表3.4 また鑑賞してみたいか

	回答数	構成比
ぜひ鑑賞したい	259	62.7%
鑑賞したい	151	36.6%
鑑賞したくない	1	0.2%
その他	2	0.5%
合計	413	100.0%

表3.5 実行委員やボランティアとして携わりたいか

	回答数	構成比
実行委員として携わりたい	17	8.1%
ボランティアとして携わりたい	54	25.6%
いいえもしくはその他	140	66.4%
合計	211	100.0%

3.1.2 「武蔵野アール・ブリュット2017」にご来場いただいたきっかけは何ですか（複数回答可）

来場のきっかけについて、最高ポイントは「内容に興味があった」の44.9%である。「見たい展示があった」が14.4%であり、二つを合わせた回答が59.3%を超えており、本展の展示内容、作品に興味をもって来場したとする回答が半数を超えている（表3.2）。前述した「開催を知ったきっかけ」として「ポスター・チラシ」の回答者（18.4%）と「偶然通りがかりに」の回答者（7.5%）が来場に至った要因として「内容に興味があった」につながると考えられる。「関係者がいたから」の回答は33.5%であり、これらの回答者は出品作家の家族や所属施設のスタッフ、市役所関連から来場したと考えられる。家族や知人・スタッフ、一般来場者が、アール・ブリュットへの興味・関心をもち来場したと推察される。

3.1.3 「武蔵野アール・ブリュット2017」はいかがでしたか

満足度については、「とても満足」(45.7%)と「満足」(47.2)を合わせた回答は92.9%となり、来場者の満足度は非常に高い結果である(表3.3)。

アンケートでは最後の項目として「武蔵野アール・ブリュット2017」に対する全般的な感想を自由記載として記述を求めた。記述件数は154件である。記述内容から、「作品に関する記述」と「何を感じ取ったか」について着目し、その内容から語彙を抽出し筆者がそれぞれを内容ごとに分類しカテゴリー名を設定した。

第一に、「作品」に係る語彙を記述から抽出する。抽出した語彙を「個性・発想」、「生命力・心」、「色・根気・プロセス」、「作者の思い」、「全体的イメージ」の5つのカテゴリーに分類した(表4.1)。

作品に関する記述では、「個性・発想」に関する記述が18、「生命力・心」が15、「色」が4、「根気・プロセス」が5、「作者の思い」「全体的イメージ」それぞれ3であった。作品の発想、表現方法などを「個性」「斬新」「自由」などの言葉で記述し、その表現方法の豊かさに着目している。「生命力・心」の分類には、「無垢」「純粹」という穏やかでやわらかなイメージと、「力強さ」「パワー」「エネルギー」などの強さをイメージする語彙が記述されていることが特徴的である。さらに、「色」、「制作のプロセス・根気」、「作者の思い」に分類した記述からは作品から美術的な要素に関するイメージを感じ取っていると推察される。

第二に、「何を感じ取ったか」に関連する語彙を記述から抽出する。抽出した語彙を「感動・豊かな気持ち」、「力」、「新しい自分」、「アートと自分」の4つのカテゴリーに分類した(表4.2)。

「感動・豊かな気持ち」のカテゴリーに分類した記述には、「豊かな」、「楽しい」など肯定的なイメージを表す語彙が抽出された。「力」の分類では、前述した「作品に関する記述」と同様の語彙が記述されている。

この分析で着目するのは、「新しい自分」と「アートと自分」など「自分」に対する捉え直しの記述である。「新しい自分」とカテゴライズした記述からは、来場者が鑑賞行為により自分の価値観が広がったと感じとったことを意味する。さらに、「アートと自分」にカテゴライズした記述からは、アートに対する捉え直しが生まれたことを意味する。とくに、「身近に感じた」、「アートと日常が近しく感じる事ができた」、「作品との距離感が縮まった」と記述されているように、アートを自分にとって身近なものとして感じ取ることができたことと記述している。このことから、それまで自分にとって何らかの距離感をもっていたり、自分の生活とは関係がないものと捉えていたりした来場者の「アート」の意味が揺さぶられ、自分にとっての「アート」の意味を再構成したと考えられる。

表4.1 作品に関する記述(自由記述)

個性・発想		生命力・心	
個性豊か	多くの切り口	生命力	のびのびとしたおらかさ
様々なタイプ	その人しかない観点	力強く生き生きとした	生き生きとした
個性的な絵や作品	個性、自由な発想	心を揺さぶられる力強さ	無垢なエネルギー
アイデアの幅広さ	自由な発想	「生」	純粹なエネルギー
自由な表現	いろいろな	息遣い	純粹な力
変化に富んだ	自由な技法・表現	生きるパワー、喜び	純粹な心
個々の個性	独特な技法	熱い情感	
斬新な	何とも言えない感性	心の叫び	
様々な	想像力が豊か	心の表現	
色	根気・プロセス	作者の思い	全体的イメージ
いろいろな色づかい	根気	心に話しかけてくる	わかりやすい作品
興味深い色の配色	丁寧な作品	作り手の気持ち	完成度の高い作品
色の出し方	根気と熱意	作者の思いや感性	興味深い作品
色合い・線	一生懸命 制作のプロセス		

表 4.2 何を感じ取ったかに関する記述

感動・豊かな気持ち	力	新しい自分	アートと自分
心が和んだ 感動した 楽しかった 素晴らしい 楽しい気分 子供と楽しめた 感銘を受けた 気持ちが豊かになった 幸せな気持ちになった 自由を感じた 心を揺さぶられた	生きる力をもらった 勇気もらった 「生」を実感した 元気がわいてきた 鼓舞してもらえた	世界が広がった 新しい世界を知った 新鮮だった 想像力が刺激された 自分の行動を改めて考えた 日常のささいな事を大切にしようと思わされる	アートを身近に感じた アートと日常が近しく感じる事ができた 作品との距離感が縮まった(解説あり) アートって素晴らしい 呼びかけてくるものを感じた 障害を持った方の美術イメージがわかった

3.1.4 また鑑賞してみたいか

「ぜひ鑑賞したい」、「鑑賞したい」という回答を合わせると 99.3%と肯定的に回答している。前質問の満足度と合わせれば、ほとんどの来場者が本展に満足し、次もまた鑑賞したいと回答している。内容や展示作品に興味をもって来場し、鑑賞した結果、大きな満足を得られていることになる。

3.1.5 武蔵野アール・ブリュット実行委員会やボランティアとして携わりたいと思いますか

「実行委員として携わりたい」(8.1%)、「ボランティアとして携わりたい」(25.6%)という回答を合わせると、今後何らかの形で携わりたいと考えている回答が 33.7%である(表 3.1)。市民参画で開催された本展の特徴に理解を示すものであり、何らかの形で関与したいという回答からは、鑑賞者のアート・ブリュットへの興味や関心が高まったことが推察される。

3.1.6 本展示で印象に残っている作品がありましたら3点まであげてください

この項目への回答数は 429、記述された作品は 115 点である。全出品作品 196 点のうち 115 点があげられていることから、来場者の印象に残った作品は多様に広がっていることがわかる。そのうち記載された件数が 10 以上であったのは 36 作品である。「印象に残る」とあげられた作品のうち最も件数が多かったのは、『電車の顔、集合!』³(写真 4)であり、82 件である。次いで、『山びこ』⁴(写真 5)が 38 件、『ぼくはあきひさ』⁵(写真 6) 33 件、『マドリッド市街』⁶(写真 7) 32 件である(記述内容の一覧については文末に資料として記載する。)

以下に、作品・作者について、及び記述された「印象に残った理由」について考察する。

(1) 『電車の顔、集合!』

画面を埋め尽くした電車の圧倒的な迫力、一つ一つの電車の緻密な描き分けなどが印象的な作品である。82 件の記載があり、群を抜いて記載件数が多かった作品である。理由の記述は、「電車が好きという気持ちが伝わってくる」、「好きなものに熱中する集中力」、「見ていて、作者の楽しい気持ちが想像できる」、「作品の細かい表現」などである。「電車が大好きなんだな」と作者に心を寄せ、緻密な表現で描き分ける表現方法、画面を電車で埋め尽くす迫力などが鑑賞者の印象に残る。

本作品のように画面を隙間なく埋め尽くす表現は、アール・ブリュットの一つの特徴として考えられている。しかし、鑑賞者は「アール・ブリュットらしい作品」としてこの作品をあげたと考えより、この作品の特徴を感じ取り、作者へ思いを寄せていると考えられる。

(2) 『山びこ』

理由の記述には、「まさかチラシがこんな作品になるなんて驚いた」、「これ何?」、「形が面白い、どうやって作ったのか」、「素材の不思議な集積力」など、材料や表現方法の意外さについての記述が多い。鑑賞者の

美術の枠組みや自分の価値観を揺さぶられている。さらに、「時間と手間を考えたらすごい」と作品から感じ取る時間についての記述が見られた。

本作品は展示作品の中で数少ない立体造形である。雑誌やチラシを切り（ちぎり）、貼る行為を重ねることで生まれる造形物は時間の経過とともに増殖していく。作者は、社会福祉法人にじの会（三鷹市）に所属し、全国の公募展での入選や美術館やギャラリーなどでの展示実績がある。同じ施設（アトリエ）に所属する他の作家も同様の活動歴がありアール・ブリュット作品を生み出す場としての福祉施設、支援者、指導者の質の高さが推測される。

言葉によるコミュニケーションが難しいため、作者本人が「何か」を表現しようとしているのか、そもそも「美術作品」を表現しようとしているのかは明確に説明できない。作者本人にとって意味のある「行為」が積み重ねられ、結果としての作品がそこに生まれる。この作品は、彼を支える人（スタッフ）がその行為と結果としての「作品」にアートとしての価値を見出し、「作品」として鑑賞者に問いかけることによって「美術作品」として生まれたものであると言える。

(3) 『ぼくはあきひさ』

展示作品リストによると、「彼が何を考えているのかを聞きたくて」と、作者（母）が自閉症の長男に思いを馳せて表現された作品である。「あきひさ」と思われる人物を画面中心に描き、「あきひさ」がつぶやく言葉をひらがなで表記し、画面を構成している。

理由の記述には、「母として共感する」、「息子さんの心を包み込む」など母が長男に寄せる愛情に共感するとともに、「文字と絵の構成がよかった」、「文字が書かれているのが面白い」など画面構成や表現方法についての内容がみられた。

作者自身に障害があるのではなく、自閉症の長男（あきひさ）を主題としている本作品は、「障害者の美術」とする概念からは外れるものであるが、「美術の専門的な教育を受けていない人たちが制作した美術作品」という解釈と本展の開催趣旨・応募資格からは外れるものではない。アール・ブリュットを広く解釈し、障害者を主題とした「表現したい」という作者の気持ちが伝わる作品であると考えられる。このような作品の主題、作者の思いへの共感が多く寄せられていたことに加え、文字と絵画が組み合わせられた本作品の画面構成や表

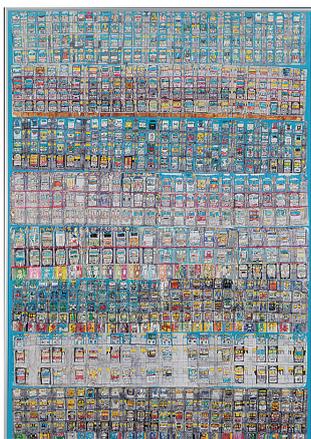


写真4 『電車顔の集合!』, F・S, ボールペン, 鉛筆, 色鉛筆, マーカー, 48.5 × 98.0cm



写真5 『山びこ』, 金崎将司, 雑誌やチラシなどの紙の集積, 50.0 × 25.0 × 31.0cm



写真7 『マドリッド市街』, 前田和實, 画用紙, 鉛筆, 48.5 × 98.0cm



写真6 『ぼくはあきひさ』, 天沼啓子, アクリル絵の具, 70.5 × 63.0cm

現方法などの造形視点からの記述が寄せられていることがわかる。

(4) 『マドリッド市街』

B4の画用紙2枚に鉛筆で描かれた緻密なマドリッド市街の描写が印象的な作品である。展示作品リストには「美術を専門に学んではおらず、大学教員として滞在したマドリッド市街の様子を独学で描いた」と記され、前出(3)の作者同様、作者自身に障害は認められない。

理由の記述には、「町の情景が目浮かぶ」、「マドリッドに行ってみたくと思った」など描かれた風景に想いを寄せるものや、「緻密、誠実」、「ていねいに描かれた」など緻密な表現に関するものがみられた。本作品を「印象に残る」とあげた回答者が、作者の障害の有無について正確に理解していたのかは不明であるが、鑑賞者は作品としての完成度の高さや描写力を感じ取り、「絵画作品」として受け止めていたと推察する。

3.2 考察

以上の結果と分析から、鑑賞者に、作品制作の発想の豊かさや独特な表現方法・色に着目し、鑑賞者自身の価値観の変容、さらに美術概念の転換や広がりが生じたことがわかる。また、鑑賞者は制作に費やした時間と行為の積み重ねを、驚きをもって受け止めていた。このことは、鑑賞者にとって、新しい価値や意味を創出することであると考えられる。来場者は、作品から、その発想や構想、表現方法、表現されたテーマなどを自分なりに解釈し、共感したり、驚いたり、感動したりしている。それはまさしく美術における鑑賞行為そのものである。

印象に残った理由の記述に、「障害があるのに」という記述が皆無だったことにも着目したい。鑑賞者は、「障害者」というフィルターをもつことなく、それぞれの作品と誠実に向き合っていたと推察する。「印象に残る作品」にあげられた上位4作品は、「障害者の美術」とするアール・ブリュットの一般的な定義から外れる2作品、アール・ブリュット作品の特徴を代表するような2作品であった。回答者がこれらの作品と出会い、自分なりの意味をもち、価値を見出したということが重要であり、作者についての情報をどれだけ正確に把握していたのかはそれほど重要ではない。

アール・ブリュットは、作品自体を詳しく語られることは少なく、直感的に受け止められ、わかりやすいものであると考えられている側面がある。「純粹」、「無垢」、「魂」などの表現がアール・ブリュットを語る際に冠のように付けられることが多いことから、一般に我々の社会が一方的に抱いている障害者のイメージと障害者の美術を重ねて見ていることが推察される。誤解を恐れずに言えば、障害者は純粹で、無垢な存在であるという言説そのものが幻想であり、そのような文脈でアール・ブリュットを語ることは本来のアール・ブリュットの価値から目を逸らそうとしている行為にも等しい。第2章で述べたアール・ブリュットの定義や歴史から明らかなように、精神病者の美術作品に表れる「狂気」や「強い衝動」、「性的なこだわり」など、純粹で、素朴で、やさしいものだけではないのである。鑑賞者が「無垢」、「純粹」あるいは「障害にかかわらず」と言ったアール・ブリュットに纏わる様々な印象や感想をもつことは否定するものではないが、「障害があるから純粹・無垢」というステレオ・タイプの概念ではなく、自分と向き合い、見つめ直す行為としての鑑賞行為が認められた。このことは、自分にとっての既存の「美術」ではなく、「新しい美術」の価値観が構築されたことを意味する。記述内容から再度引用すれば、「アートを身近に感じた」のである。

現代社会生活を営む上で、「美術に関わらない人」はいないはずである。しかし、未だ「美術」は難しいもの、敷居が高いものと考えている人は少なくない。「美術」が特別な才能をもったり、専門教育を受けたりした一種の特権階級の人たちだけのものと捉える背景には、「美術は理解するものである」という理解があるように考えられる。本展への来場者にも少なからずそのように考えている人たちがいたと考えられるが、作品と向き合うこと、つまり、単なる来場者から鑑賞者への転換が生じたのではないだろうか。

本展の複数スタッフが、会場を一見しただけで通り過ぎるのではなく、作品の前で長く立ち止まっている来場者、また数名で来場した人たちの作品の前で対話を重ねている様子が印象的だったと語っていた。作品と向かい合う静謐な時間と作品や作家について語り合う時間、この相反するような鑑賞行為が会場内で成立

していたということである。多様な鑑賞行為の場が会場に存在し、鑑賞者にとっての新しい価値が生成していたことを物語るものであると考える。

4. 結論と課題

本展には福祉関係にかかわる人、出品作家の家族や友人、行政にかかわる人など、多くの人が来場している。一方、作者や実行委員会にかかわる来場者ではなく、アール・ブリュットに関心を寄せる人、ポスターやチラシ・市報などの広報から興味を抱いた人たちなど、来場の動機となったきっかけは多様であった。また、アンケートに回答した人たちのほとんどが本展に対して「満足」であるとしていることから、アール・ブリュットには人を惹きつける「何か」があると考えられる。

デュビュッフエがアール・ブリュットを見出し、その概念を構築した時代や社会背景から時を経て、現在の日本におけるアール・ブリュットの概念をその当時のままで定義することは、現在の日本におけるアール・ブリュットを語るうえでは大きな意味はもたない。何故なら、現在の日本におけるアール・ブリュットは、障害をもつ人の表現活動を支えたり、環境を整えたりするなかから生まれているからである。さらに、その表現行為に意味や価値を見出し、社会に示す人の存在が重要な意味をもっていることは確認すべき重要な視点である。また、作業療法としてのアート、グループの共同行為として生まれる造形作品、作品そのものよりも作品が生まれるまでの行為のなかに存在するアートなど、これまでの「美術」の枠組みの中では捉えきれない意味や価値が存在する。

「ファインアート」と称される美術や、特別の美術教育を受けた一部の人たちだけの美術ではなく、自分にとっての身近なアートとしての可能性がアール・ブリュットには存在する。アール・ブリュット作品の鑑賞行為は、それまで自分がもっていた「美術（アート）」や「日常」の枠組みを揺さぶり、その規範を超え、自分を更新していくことにつながる意味をもち、既存の「美術」の枠組ではなく新しいパラダイムの構築につながる可能性を創出するものである。

アール・ブリュットは作品を制作する人、作品を鑑賞する人に加え、作者の周囲の支援者・見出す人の存在が不可欠である。つまり、アール・ブリュットには、支える人が障害をもつ人の日常生活や表現行為のなかに意味や価値を見出していく視点をもつこと、作者の表現行為を引き出し、働きかける能力を高めることが非常に重要になってくる。アール・ブリュットの、新しい意味や価値を見出す可能性を有する「美術（アート）」としての意味が示唆されているのである。

現在の日本におけるアール・ブリュットは「美術」の枠組みから逸脱したものを「美術」から語ることで自体に矛盾が生じている困難さを抱えている。ならば、これまでの「美術」の文脈ではなく、新しい「美術」の文脈からアール・ブリュットを語る必要があるのではないだろうか。本研究では、アール・ブリュットを「見る」人たちが、作品から何を感じとるのかを考察することにより、鑑賞行為が意味する新しい意味や価値の創出につながることを明らかにしてきた。そこで見出された「新しい意味と価値の創出」は現在の「美術」を語る文脈としての可能性を有すると考えられる。

本研究では、アール・ブリュットの鑑賞行為を考察することで、新しい意味や価値の創造としての「美術」としての示唆を得ることができた。今後は、本研究を基礎研究とすることで、「美術」の概念や枠組みを再考察し、子どもの表現行為・鑑賞行為との関連性、美術教育との関連について研究を発展させたい。

謝辞

本稿をまとめるに際し、「武蔵野アール・ブリュット 2017」実行委員会・事務局に感謝申し上げます。また、出品作品画像等の使用をお許しいただいた E.S 氏、金崎将司氏、天沼啓子氏、前田和實氏にも感謝申し上げます。

注

1. 社会福祉法人松花苑「みずのき」は京都府にある障害者支援施設である。筆者は、みずのきにおける絵画教室作品約50点を「MIZUNOKI EXHIBITION for きっず—子どものための展覧会—」（1999年12月～2000年2月）として品川区立公立小学校を会場とした企画展を企画・実施した。
2. 「武蔵野アール・ブリュット2017」実行委員会が作成、実施、回答集計した。本研究の分析データとして武蔵野市健康福祉部障害者福祉課及び実行委員会の許諾を得て活用した。
3. 『電車の顔, 集合!』, F.S, 絵を描き始めたのは6歳の頃, チョコボールのキャラクター「キョロちゃん」でした。その時から彼なりのこだわりがあり, 視野が広がり, 大好きなガンダムや電車を描くようになりました。(作者・作品についての応募者記載より)
4. 『山びこ』, 金崎将司, 1990生, 社会福祉法人にじの会, 2013ポコラート全国公募展 vol.3, アーツ千代田3331など出品, 受賞多数。始めは雑誌やチラシを使ったコラージュを作ってもらいました。ところがなぜか彼がコラージュを続けていくと, どんどん一部分に紙を貼り重ね, ポッコリ盛り上がっていきます。そのまま様子を見て半年ほど経過し, この作品が生まれました。(作者・作品についての応募者記載より)
5. 『ぼくはあきひさ』, 天沼啓子, 建築設計事務所主宰。二児の母。長男が重度の自閉症であったことで障害者施設の設計や障害者のためのカフェのリフォームなどのボランティア活動をしている。長男の「あきひさ」が何を考えているのか聞きたい思いにかられる。なので, 彼が考えていることを想像して描く。(作者・作品についての応募者記載より)
6. 『マドリッド市街』, 前田和實, 1945生, 大学教員を定年退職した元教員。1999年在外研究で, スペインマドリッドで一年滞在する機会を得る。絵心はなかったが, 滞在期間中に趣味として制作する。この作品はB4画用紙横2枚で帰国後に完成させる。(作者・作品についての応募者記載より)

引用文献・参考図書

1. 図書

服部正, 『アウトサイダー・アート現代美術が忘れた「芸術」』, 東京都, 光文社, 2003, pp47-55, pp117-131

ミッシェル・テヴォー (著), 杉村昌昭 (訳), 『アール・ブリュット—野生芸術の真髄』, 京都府, 人文書院, 2017, pp11-18

保坂健二郎 (監修), 『アール・ブリュットアート日本』, 東京都, 株式会社平凡社, 2013年, pp60-66

2. 論文

新井馨, 「アール・ブリュット概念の再考と美術の構造—美術教育の『美術』を考えるために」, 『美術教育研究』49号, 大学美術教育学会, 2017, pp17-24 新井馨, 「アール・ブリュットが内包する『プリミティヴ』の考察」, 『美術教育研究』47号, 大学美術教育学会, 2015, pp23-29

3. web サイト

武蔵野アール・ブリュット2017実行委員会, 武蔵野市, <https://musashino-art-brut.jimdo.com> 参照 2017-8-26

アール・ブリュット支援, 日本財団, http://www.nippon-foundation.or.jp/what/projects/art_brut_support/, 参照 2017-8-26

エイブル・アート・ジャパン, <http://www.ableart.org>, 参照 2017-8-26

にじの会美術創作活動, 社会福祉法人にじの会, <https://www.facebook.com/にじアート社会福祉法人にじの会美術創作活動-1142490239152785/>, 参照 2017-8-28

4. 配布資料

「武蔵野アール・ブリュット展 (仮称)」企画書, 第一回武蔵野アール・ブリュット展 (仮称) 実行委員会配布資料, 「武蔵野アール・ブリュット 2017」, 実行委員会事務局作成 (2016.8.18 配布)
武蔵野市市政施行 70 周年記念事業「武蔵野アート・ブリュット 2017」武蔵野市立吉祥寺美術館展示作品リスト, 「武蔵野アール・ブリュット 2017」実行委員会事務局作成 (2017.7.78 配布)

資料：「印象に残った3作品」の理由（自由記述） 上位に抽出された4作品

『電車の顔、集合!』

こんなにいっぱい凄い!	顔が同じ	電車が大好きな楽しい気持ち が伝わる	よくこんなたくさんの種類の電 を描いたなあ、種類の多さがす ごいのと、電車への想い入れが 感じられたので
仲間はずれがなかった。大好き と安心がえがかれている	細かくて何日かかったのかと考 えさせられた	圧倒された	
楽しい、わくわく	根気に正確な描写、すごい一 言	ボコボコ、テカテカしている、密 なところ、好きが詰まっていると ころ	続きがみてみたい
電車の‘顔’を一つ一つ精密に 描いた大作で、全体としての迫 力がすごいです	世界観がすてきでした	すごい一言	鉄ヲタ観が素敵です。カタログ 的に集めるのは楽しいもので すね。
電車の横の人?が気になった。	電車への愛!楽しんで描いてい ることが伝わってくる!	細かい作業がすごかった	電車への愛が伝わってきました
努力	電車が大好きなんだな、と思 いました。スゴイです!	迫力を感じました	アリガトー
本物の電車のリアルな描写が凄 い。日本にもう一人同じテーマの 画家がいます。	1つ1つの電車の種類が書いて あって、感動したから	電車好きの息子2人のイチオシ です。尊敬の細やかさです。	自分自身、鉄道好きで見ていて 楽しかったから
細かな部分まで丁寧に描かれて いた	細かく描かれていてすごかった です	昔、息子もこんな絵を描いてい たが、ここまで「集合」させるこ とはなかった!	電車が好きだろうと想像しなが ら観ました
すごい情熱を感じる。電車が好 きなんだ	連鎖、圧巻	マンガラおもしろい	大好きなのがよく伝わってきた
電車を観察して、ちみつに描か れているのがスゴイ!	細かさ	1台ごとに違う顔をみごとに描か れています	好きな電車の集合、迫力あり
努力が感じられた	自分の好きなことへの熱意、集 中が頭に浮かぶ	電車ってこんなにいろんな顔が あったの?	描いている方は楽しいでしょ うね。そう見えます
電車が好きなことが良く伝わる	好き!が伝わってくる。楽しくて 仕方ないんでしょうね!	我が子も電車好き。気持ちが良 くわかる	あまり細かく絵いているので感 動しました
作品の展示方法の効果もあるだ ろうが、電車の顔というタイトル にふさわしいこだわりがよい	すごく根気がいると思って	こまかい	大作ですね
	大作	観察力の素晴らしさ	細かい電車の顔がすばらしい
細かく色々な電車やもの顔が1つ の作品の中にまとまっていて面 白いと感じた	とにかく細かい、一つ一つの絵 や色が全てちがいが圧倒される	いろんな電車がいっしょうけん めい描かれている	作品ができるまで何時間掛った のか?気になりました。
迫りに圧倒	正にアールブリュット	電車の顔、集合すごい一言	子どもに見せたい

『やまびこ』

1枚1枚のチラシなどがこんな 作品になるなんてびっくり。すて きです	制作方法におどろいた	見ていて楽しくなりました。私も 作りたくなりました	〈立体〉ゴミを重ねていく様なそ の時間とプロセスに発送が素晴 らしい。長い時間を自分自身と の内面対峙していると思う
まさか新聞紙とチラシで出来て いるとは思わなかった	紙の積み重ねが創造的な芸術を 作っていることに壮大な美を感 じる	ひたむきなところ	時間と手間を感じる
形もおもしろいけれど、これが 雑誌やチラシでできているとい うのがおどろきだったので	アイデアが面白い	自然が創り出したもののよう。意 味や策を超えた存在感!	教え子、インパクトのある作品
以前より見ていて変遷がおもしろ かった	制作過程をお伺いし、びっくりし ました	きれい	具体的なイメージがわからないと ころ
発想のおもしろさを感じました	素材の不思議な集積力、造形力	何とも言えない心地よい形	特別な石みたい。形がおもしろ い。色も味がある。テクニック がすごい
インパクトがある	発想が面白い。こんな発想なか なかできない	紙で仕上げているとは思えませ ん	どうやって作ったのかなと思って
色と形の広がりすばらしい	よこんでいるあそぶ犬のような エネルギーが来る	作り方を知りたい	
一枚一枚の紙を重ねてつくられた この作品は、作成の年月を感じ させるもので、思わず感嘆してし まいました	コラージュの概念が変わるとら われない、目からウロコな作品 で印象深かったです	分野にとらわれずにおさまりきら ないものを感じる	

『はくはあきひさ』

思わず見入った。字がキレイでおどろき	絵もうまくてすごくステキですが、その文章、絵の雰囲気から家族への愛情やいろいろな想いが感じられるので	文字と絵の組み合わせが面白くどちらもすごくきれいだった	文字も書かれているのがめずらしい
文字さえもアートになっていて、表情から苦難、苦悩の気持ちがよく伝わってきたため	母の愛を感じました	感動させるものがある	言葉に感動
言葉では表しきれない母の思いを感じます	彼の澄んだおだやかさを感じる	母親として共感できる	花火とすぐわかりました。大空に舞う様子がとてもすてきです
息子さんの心の中を包みこむように表現されていると思いました	まっすぐした想いを感じたため	心象風景が表情に出ている	絵と文字のバランスがおもしろい
絵で伝えたいことを文字で表しているのが斬新だと思いました。絵を見ることでまた違った見方ができました	独自のアート感で目を引いた	ストレートな気持ちの表現が伝わりました	つぶられている文字に深いものを感じた
	文字が気になった	本人の思いを感じとれる	

『マドリッド市街』

鉛筆で細かい作業、どの位の月数日数? 根気のいる事。とても素晴らしい作品	チラシで見つけて見たいと思いました。とても細かくて素敵な絵でした。実際の町が見てみたくなるような絵で、見ていて楽しかったです	遠のほうまでかいているので目が良いんだなと思った	細やかで丁寧なタッチで描かれていたため
細かく、鮮やか	細かいところまできちんと描かれていたから	街中の細部を詳細に描いている	描けそうでかけないのが街なみ、ふんいきがよく出ていますね
そばに行くといとつひとつ確かにあるのに、離れるとぼやけてしまうところ	繊細で緻密な作品だった	サヴァンの人が書く絵に似ていたため印象に残った	鉛筆画の細い線から全体がまとめあげている根気に感動
とても丁寧に書かれていました	段違いがおもしろい	迫力が伝わってくるから	マドリッドに行きたくなりました
細かい線で表している	知人の作品	街の情景が浮かぶよう	大胆な色づかい
緻密な誠実なタッチがすばらしい!	描写がすごい	細かく遠くまで全部書いているのがすごいと思いました	知人の作品で賞をとったと話してくれたので